

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	高機能広汎性発達障害児をもつ父母の心理的体験と社会的援助の在り方
氏 名	和田 浩平

論 文 内 容 の 要 旨

第1章 高機能広汎性発達障害児をもつ親の心理的体験とソーシャルサポートおよび家族機能に関する研究の概観

これまで、高機能広汎性発達障害（High-Functioning Pervasive Developmental Disorder: HFPDD）児をもつ父母の心理的体験過程は、障害受容過程と障害認識過程の二つから検討されてきた。この二つの過程はともに深く関連し合っていると考えられる。しかし、これらの関連についてはまったく検討されていない。また、障害受容や障害認識は親の心理的体験の一側面であり、これらの他にも、まだ焦点が当てられていない心理的側面が見出される可能性もある。それらがどのように絡み合って体験の総体を成しているのかを検討することは、より深い親の心の理解につながるものと考えられる。よって、本論文では、HFPDD 児をもつ父母の心理的体験を広範かつ詳細に描き出すことを第一の目的とする。また、障害児の親支援において、ソーシャルサポートの有効性が指摘されており、HFPDD 児の親においても認められている。特に、HFPDD 児の親には、抑うつの問題が生じやすいことが知られており、ソーシャルサポートによって父母の抑うつを緩和できる可能性がある。しかしながら、HFPDD 児をもつ父母の抑うつとソーシャルサポートの関連については検討されていない。加えて、家族機能研究において、コミュニケーションが父母の精神的健康の向上に寄与することも知られている。特に、HFPDD のように障害認識が曖昧になりがちな障害の場合、父母間で障害の理解や認識に差が生じやすく、コミュニケーションが閉鎖的になりやすいと思われる。よって、HFPDD 児の父母の抑うつとソーシャルサポートおよび夫婦間コミュニケーションの関連を明らかにし、支援の在り方について検討することを第二の目的とする。

第2章 高機能広汎性発達障害児をもつ母親の心理的体験過程について（研究1）

研究1では、HFPDD 児をもつ母親が経験する心理的体験の諸側面と、それらの関連・変化の在り方を心理的体験過程として質的な手法を用いて明らかにした。HFPDD 児の

母親 12 名に対して半構造化面接を実施し、分析を行ったところ、①HFPDD および子どもの特性の理解、②障害認識、③障害観、④特性への感情・態度、⑤社会的イベントの 5 つのカテゴリーが得られた。さらに、同時に得られた 16 個のサブカテゴリーの関連について検討した結果、(1)自身の育児への自責感を抱いていた母親にとって、障害児であることの認識は安堵感を得られる体験ではあるが、障害への抵抗感から悲嘆・不安にも苛まれること、(2)悲嘆・不安と期待・安心といった両面の感情は特性が問題となるイベントや子どもの成長・落ち着きといった現実の出来事、さらには家族を取り巻く周囲の対応の在り方に伴って循環的に移り変わること、(3)HFPDD の知識的な理解と特性の経験的な理解が結び付くことでわが子が障害児であることの認識を得て、育児への手ごたえや子どもの気持ちに寄り添う姿勢をもてるようになること、(4)障害への抵抗感は、他の子どもと親・支援者との出会いや周囲からの特性への肯定的な意味づけによって障害を個性とする態度へと移行すること、が示唆された。

第 3 章 高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理的体験過程について (研究 2)

研究 2 では、研究 1 と同様の手法を用いて、HFPDD 児をもつ父親が経験する心理的体験の諸側面と、その関連・変化の在り方を心理的体験過程として検討した。その際、同じ障害をもつ子どもの父親であっても、その体験の在り方には個人によって違いが生じ得るものと考えられた。そのため、父親によって異なる心理的体験過程に注目し、詳述することとした。HFPDD 児の父親 14 名に対して半構造化面接を実施し、分析を行ったところ、①HFPDD および子どもの特性の理解、②障害認識、③障害観、④特性への感情・態度、⑤社会的イベントの 5 つのカテゴリーが生成された。さらに、同時に得られた 16 個のサブカテゴリー間の関連について検討した結果、(1)父親は、周囲からの指摘・告知と同時にわが子が障害児であることを実感する者と腑に落ちない感じを経験する者とに分けられ、それぞれ認識に伴う感情も異なっていること、(2)障害への抵抗感は、同じ障害をもつ子どもや異なる価値観をもつ親との出会いを通じて障害を個性とする態度へと移行すること、(3)悲嘆・不安と期待・安心といった両面の感情は、特性が問題となるイベントおよび子どもの成長・落ち着きに伴って循環的に移り変わること、(4)HFPDD の知識的な理解と子どもの特性の経験的な理解が結び付くことが、わが子が障害児であることの実感へとつながること、(5)障害への抵抗感は、他の子どもと親・支援者との出会いによって障害を個性とする態度へと移行すること、が示唆された。

第 4 章 高機能広汎性発達障害児をもつ父母の抑うつとソーシャルサポートおよび夫婦間コミュニケーションについて (研究 3)

研究 3 では、HFPDD 児をもつ父母の精神的健康の指標として抑うつに着目し、

ソーシャルサポートおよび夫婦間コミュニケーションとの関連について検討した。質問紙調査によって得られた 43 組の父母の回答を分析したところ、(1)抑うつ状態と判定される者は、母親で 67.4%，父親で 48.8%であり、平均値も父親に比べ母親の方が高いが、父親も母親同様精神的負担が大きいこと、(2)父母の抑うつとフォーマルおよびインフォーマルな資源からの実際の・心理的サポートとの関連をみたところ、インフォーマルな資源からの実際の・心理的サポートとの相関がみられること、(3)母親は家庭内・外の援助資源からのサポートを経験しているが、父親は家庭内の援助資源からのサポートに偏ること、(4)父母それぞれの抑うつと配偶者からの実際の・心理的サポートとの関連をみたところ、母親の抑うつは父親からの実際のサポートとの負の相関が強いのに対し、父親の抑うつは母親からの心理的サポートとの負の相関が強いこと、(5)抑うつと夫婦間コミュニケーションとの相関は父母ともに有意であったが、父親の方が強い相関があること、が示された。

第 5 章 総合考察

まず研究 1~3 で得られた知見を概観した。その後、HFPDD 児をもつ父母の心理的体験を整理したところ、次の 4 つの共通する体験がうかがえた。すなわち、(1)障害への抵抗感を背景として障害を認めることへの葛藤を経験するとともに、悲嘆・不安に苛まれること、(2)HFPDD の知識的な理解と子どもの特性の経験的な理解が結びつくことで障害児であることの実感が得られ、苛立ち・戸惑いが軽減すること、(3)同じ境遇の親と子どもとの出会いを通して障害への抵抗感は薄れ、障害を個性とする態度を得ること、(4)子どもの環境への適応によって期待・安心といった感情を抱くものの、特性が問題となるイベントによってかつての悲嘆・不安が再燃するという循環的な体験過程を経験すること、である。続いて、父母の心理的体験の差異について検討したところ、社会資源と関わる機会の違いが、父母の辿る過程に差異を生みだしているものと考えられた。特に、HFPDD の知識的な理解と子どもの特性の経験的な理解が結びつく過程や、障害への抵抗感が和らぎ、障害を個性とする態度をもつようになる過程に、父母間で質的・時間的差異を生じさせるものと思われた。さらに、こうした差異は、障害認識やそれに伴う感情体験にも影響を及ぼし、父母の心理的体験過程に大きな違いを生み出すことが示唆された。主要な違いとしては、次の 4 点が挙げられる。すなわち、(1)母親は発達初期に子どもの特性に違和感や問題意識を覚え、自身の育児の責任として自責的になるものの、父親は特性には気づきながらも楽観的であること、(2)母親は子どもの特性への違和感から、障害への抵抗感は抱きながらも、障害の有無を明確化することに積極的になるが、父親の障害認識過程は特性への楽観的な態度や障害への抵抗感から受動的なものになりがちなこと、(3)母親は、障害児であること認識から悲嘆・不安とともに安堵感を経験するものの、父親の中には悲嘆・不安のみを経験する者がいること、(4)障害児であることの実感へと至る時期には父母間で差異があり、父親の中には障害児で

あることを認識しながらも腑に落ちない感じを抱く者もいること，である。こうした違いは，父母が互いの心理的体験を共有することを困難にし，母親に育児負担が偏ったり，父親が子どもの現状を把握できず不安に苛まれたりするものと考えられた。その結果，夫婦関係が悪化し，父母の精神的健康や子どもの成長や支援にも影響する危険性があることを考察した。おわりに，今後の社会へ向けての提言をした。まず，家族や地域，学校をはじめとする子どもの生活場面における HFPDD および HFPDD 児をもつ家族への理解を築き上げることの重要性について述べた。続いて，医療・療育機関や学校といったフォーマルな援助資源のサービスの在り方について，改めて見直すことの必要性について言及した。そして最後に，夫婦間コミュニケーションによる支援の可能性について論じた。